ひとり稽古を振り返る

・意外と楽しかった〈すずね〉
俳優がどうやってみたいかを「主体的に」考える必要性
＝やりたいという欲望に向き合う
普段は演出家の「やってみよう」に従ってしまいがち
順応できるのが良い俳優、みたいなスタンス×

・選ぶときに大事にしていたことは？〈ゆか〉

外は情報量多く
気を取られる怖さ
影響のもとを
辿れるように
したい

媚びずに家にいる〈すずね〉
外にはあんま出なかった
家の中か敷地内（パーソナルエリア）
意識としては「部屋のなかで」くらいだったかな
自分の力でどうにもできないものの側にいる〈ゆか〉
時計の針
部屋から見える電車
幻のフェンスに留められたリボン
→向こうは向こうで独立したものに相対する
→影響される
同意〈すずね〉
ベランダの回は人を相手にしたかった
ルールを外在化/他者化しておく
＝読んでいるときの自分にはどうにもならない
中動態を感じた瞬間はやはりシャドーイング
＝外からの制限（強い制限は自作できない？）

・スコア作成が難しかった〈ゆか〉
決めすぎるとできなくなってしまいそう
できそうなラインを見つけるのが難しい
作り込みすぎることで他との関係が閉じてしまうのでは
→どこまで決めてやるかと悩んだ
↔ざっくりやっていると途中で飽きる（＝不足感）
ex.）リボンが風に吹かれている
→最初はそれだけで十分に影響される
次第に物足りなくなる（まぁリボンだね……）
「自意識の芽生え」との関連性〈すずね〉
不確定性がもはや確定している面白くなさ
※時計の秒針はあまり飽きなかった（他の針や時間）

・印象的だった回
一番最初が印象に残っている〈すずね〉
自分の思わぬことが起こる
→横向いて喋るのって辛いのか……！！！
録音聴いたときの声の移り変わりが面白い
床が近くにあるので声が近くにある感じがする
→声の大きさに変化が出る

※姿勢といえば……〈ゆか〉
窓から外をみる、窓枠に手を置いて撮影
→つま先立ちで12分くらいやった
→身に迫る感じ（揺らしてはいけない）
変なドキドキ≒吊り橋効果
予期せぬ負荷がかかって楽しかった
（負荷かかると面白がれる機会も多い〈すずね〉）
お風呂のやつ〈ゆか〉
反響がすごい、のは前から予期していた
→浸かりながらやったことで（予期せぬ）汗！
鼻水も出そうになった、すすった音も入っている
＝負荷がかかっている状態
水滴の垂れる音、シャワーヘッドの影
（聞いていて楽しそう〈すずね〉）

・「どうやったら面白くなるだろう」〈すずね〉
①自分視点の面白さ（何がしたいか）＝正しい
②どうやったら様になるだろう＝邪念
→甘夏の回において頂点に達した

・どこまで設えていくか〈ゆか〉
自分は味つけ弱めの演出家
キメキメに作っていくのでなくゆとりを持たせるタイプ
ざっくりメイキングが癖になっている？
細かいタスクの遂行を恐れている
決めすぎないことで何か入ってくるのではないか
→文脈ではなく段落を使っていた〈すずね〉
中尾に褒められたせいでビデオ撮れなくなった〈ゆか〉
何を面白がられたのかわからないゆえの難しさ
世のアーティストはこんな気持ちだったのか〈すずね〉
これが早足なのか？よくわからないが……
そういうことを気にせずに生きていきたいよ……

・記録方法の基準
ビデオと録音、どちらが良いのだろう〈すずね〉
ビリー的には声だけ聞きたいのかな
でも甘夏と体が写っていた方が良いのではないか
ビデオで自分を写したことがない〈ゆか〉
＝ビデオと録音の差がない
自分の視線の先を写そうという意識（＝録音の補助）
→そもそも自分を写すとの発想がなかった
お客さんとしての視点でビデオを使う〈すずね〉
映像を観る人を気にしていた
自分の映像を客観視する意識も関わっているか
＝やっている時とは別様な意識で向かう
（元々の目的か偶然の結果かはわからんが）
スコアにおける差異〈ゆか〉
④で私はやったときの感想を書いている
すずねさんはやった後のことも書いている
後から聞いてもやったときの思い出しの作業だった
（私もあるよ〈すずね〉）
→同じことやっているはずなのに違うことになっている

インストラクションを読みなおす

① 今日テキストを読み上げるための空間を決定する

「テキストとの相性を考える」

あまりやらなかった気がする〈すずね〉

→そもそも「相性」とは？モチーフの一致とか？

甘夏の回はテキストにも出てくる「窓」を使った

「自分の居心地や気分」で決める

→あとから相性がやってくる

「関係」ではなく「相性」であることの優しさ

＝「関係」はつながっている感じ、踏み込まれる

「相性」は可能性を含みこむ感じがある

「納得の行く」↔邪念（面白い、様になる）

場所は結構考えている

納得のいく気持ちは存在する

② 空間内にオブジェクトを配置する

オブジェクト先行で場所を決めることもある〈すずね〉

（ニベア使うならここだろう）

「複数の」「配置する」

①と②を一緒にやっている感じ〈ゆか〉

場所の決定＝配置の完了

Ex.）リボンがある場所を選ぶ

「配置」はあまり明確に意識しなかった〈すずね〉

自分の意思ではどうにもならないもののある場所を選んでいる＝オブジェクトの方が先

きっかけはオブジェクトだけれど場所を決めた後に再配置するパターンもあった

→①②の作業は「場を設える」＝美術・音響・照明

③ オブジェクトとの関係を時間軸上にプロットする

どうしようか迷うポイント

→この作業は演出の仕事じゃないのか？

（俳優の仕事だと思って書いた〈ビリー〉）

「ルールを決める」のは演出っぽい

演出しているときの感覚に近いのは特に①②〈ゆか〉

③は俳優と演出のmix

『思想』のコップのシーンを思い出した

＝裁量がある感じ（コップかポーチかを毎回選択）

普段書かずにその場でやっていることを決めてやる〈すずね〉

やるのは俳優、決めるのは演出家

ってそれでいいのだろうかとも思うけど……

決めるのは苦しい〈ゆか〉

→「枠を決めること」で応答

細かく決めるとつじつまが合わなくなる

ex.）「このタイミングでAを見る」と決めた

→実際にやってみたら全然見たくない

→困る

「関係を結ぶ」

関係を結ぶことは決まっているけれど、どのようにして結ぶかについては開かれている

最初の一文いるのか問題

オブジェクトの配置（②）と暗唱（④）を結ぶクッションとしての役割

「オブジェクトとの関係」を強調している

④ テキストを暗唱する・記録する

記録ノートいつ書いてるか問題

それぞれの工程を逐一書きながら進めている〈すずね〉

理科の実験のイメージでやっていた

＝ふむふむとプロセスを確認しながら取り組む

全部終わってから書いている〈ゆか〉

（そうじゃない可能性もあるなと思ってはいた）

普段の稽古の延長線上

＝「私」がどうだったかを事後的に開示するものとしての記録

→映像や録音の取り扱いの差と共通している

そもそもなぜ手書きなのか

絵を描きたかった〈ゆか〉

「上書き」ではない形で文章を編集したい〈すずね〉

思いつきの順番も記録しておきたい

スコアについての記述に理由付けが含まれる〈ゆか〉

後から振り返って付け足された「理由」

→それを「記録」として扱ってよいのか

そうしないように順番に気を払ったのかな〈すずね〉

腹の立つチャートとメッセージについて

詩的で難しい……〈すずね〉

チャートの意味がよくわからない

文章も「中動態」がキーワードになりそうなのはわかるけれどやはりよくわからない……

これじゃないかと思うこともなくはないが……〈ゆか〉

＝「理由→選ぶ」ではない

→テキストと関係付けて決めないということ？

「枠を決める」と関係するのだろうか

細かく決めるとなると理由付けが必要になる

「なぜ？」という問い＝選択に向けられた問い

→「選択するときに理由がある状態」ではない？

→何かが選択として受け取られる〈ビリー〉

観ている人がそれを選択と感じてしまう

≒差別の意図はなかった、誤解を招く表現だったという名目の差別

はっきりとはわからない何かを基盤に行為している

→「何か」が気になる＝「なぜ？」という問い

「行為」にフォーカスが当たる＝問いの無効化

ex.）甘夏の回→なぜ甘夏なのか？

（以降、ゆうめい『俺』を聞きながら）

形にすることへの囚われがあることを認識〈ビリー〉
→そのままで手渡せるような形を作る意識がある
→それぞれの個人作業になっていく
インストラクションに従って俳優がやることに「そうではない」と直接指摘することに意味はあるのか
→インストラクションを書き換えるしか方法はない
→方向性の点検が演出家の仕事なのだろうか
こういうことをしたほうがいいとインストラクションに書き込むのは個別的で程度が低い気がする

ワークインプログレスの形を話す

ワークインプログレスの形

甘夏の回を例に
→「投げたり食べたりしたら面白い」と言いたくなる
＝ダメ出しに傾いていってしまう
もっと面白くなる、という目で見てしまう
「なぜ？」という問いには否定が含まれている
→発表会/WIPでやることではない
（普通に演劇すればよい話）
二人のやっていることや記録を「パフォーマンス」の枠で捉えようとするのは辛い
→「生活」「行為」（便利で危険なのだが）

「録音をアップロードする」から日記的なものへ
今日はこういう感じだった、の質感の良さ
→インストラクションに従うものがあげられる
→録音やビデオ、ノートの写真をそのまま載っけることに意味があるのか
毎日見聞きしている帯同者としては面白がれる
→Webサイト上では消去される「日々性」
ただの稽古記録と変わらなくなってしまう
一日一回記録をあげながら日々を過ごしている
＝インストラクションの遂行が日々のやること
日々の生活に埋め込まれた稽古未満の営み
重すぎず軽すぎずなもの
→日々の中で続けている/続いていることをうまく捉えたい
確からしさの感じられる記録があればよい

他者との関わり

俳優同士のやりとりがあってもよいのではないか
ex.)インストラクションや録音の利用、相互のコメント
同じテキストを使っている状態を利用する
シャドーイング再びやるべきかもしれない
一人では制限を作りにくい
細やかなスコアを自作するより現実的か
→自分から不自由にはなりにくいのだな

「精密な耳」（『聴取の詩学』を読んで）
ジョン・ケージ作品の実演に対する不満
＝もっといい音があるのではないか
なぜその音を選んだのか
→演奏者の耳の良さ＝精密な耳を要求してしまう
それは聴衆にも適用されうる
作曲者/演奏者/聴衆の全員が「聴く」ことに関わるというのは面白いのだけれど、好みやフェティッシュが捨てられないのは弱いところ（だからこそ「偶然性の音楽に移行するのであるが）
ラ・モンテ・ヤングの作品（ドローン）
聴き逃すこともまた持続音との関わり
（交響曲で聴き逃すのは否定的に捉えられる）
パフォーマンスの良さ＝「精密な耳」を持っているかという問題が浮上しにくい仕組みになっている
→「環境」としての音（楽）≠ 環境音
甘夏を扱う俳優は精密な耳を必要とする
→録音をWebサイトにあげることによって聴く人にも精密な耳が求められそうな気がする、恐れ

中尾班の状況共有と沈黙

これからやること
すずねちゃんとゆかちゃんで交互にやりコメントを残す
→それを踏まえて4/16(木)に再検討する